江風標準ルーブリック　今後の活用と分析

（1）今後の活用について（一例）

・月１回やユニットごとに実施するなど、年間の活動を複数回にわたり評価し、変容の定点観測を続ける。

・生徒に配付する際は、「指導方略」の項目を「ステップアップのための方針」とし、記述語の主語を“生徒”に置き換えて使用する。

・指導者からの評価と生徒の自己評価をもとに、面談や声がけを行う。客観的に、現状に対する認識の相違点を共有し、レベルアップのための目標をともに設定することで、探究力の向上を図るとともに、教員の指導スキルの向上が見込まれる。

・教員にとっては、指導方略の目安であるとともに、到達目標の質的な転換点を認識するための手立てとなる。

・基本的には前年度の成果を元にしたルーブリックにより指導・評価を行っていく。その成果を用いて新たに次年度用のルーブリック作成を行い、記述語の変容とともに成果の変容を分析し、事業評価および事業の改善につなげていく。

・「この活動により、このように自己の変容があった」というエビデンスの蓄積を、活動報告書の作成や総合型選抜・学校推薦型選抜などの指導に接続していく。

（2）まとめと雑感

・課題研究の構成要素

⇒　3 分野とも、レベル 1～2（～3）あたりの記述語がよく似ている

⇒　「課題研究」の構成要素や成立要件は、分野を問わず共通部分が多い。

⇒　手法の違いが現れるのはレベル 3 以降に段階的に。

⇒　課題研究の基礎的な手法を身に付けるという目的（生徒にとっては探究手法、教員にとっては指導手法）において、1 年次に社会課題をベースとした探究活動（「江風探究ユニット」）を実施することは非常に有効な手段。

⇒　1 年次にレベル 3 への到達を目安に全体指導を行い、2 年次にはテーマに即したより具体的な実証計画（実験・アンケート・文献の読み込み等）を分野毎に指導できる体制が望ましいと考えられる。

・統計学的な要素の重要性

⇒　レベル 3～4 における“質的な転換点”として、データの取り扱いへの指摘が多数。

⇒　1 年次～2 年次序盤にかけて、統計学的な指導に力を入れる必要性。

⇒　アンケートの手法やデータの収集方法についての指導が必要だと思われる。「江風探究ユニット」（概ねユニット③）における改善目標の 1 つでもある。

・現時点での「レベル 5」考察

⇒　レベル 4 との“質的な転換点”は“仮説の再設定”をはじめとする、検証結果に基づく再検証に到達したか。

⇒　社会課題への貢献という点においては評価が難しい。新規性はそう簡単には生まれない。